

【研究者】 田中 大介

(助成決定時) 東京大学大学院 総合文化研究科 超域文化科学専攻 博士課程

【研究題目】

葬儀実践の日米間比較：葬儀産業からみる「死への対処」の変容

【研究の目的】

本研究では、日米双方における葬儀実践及び葬儀産業の活動に対する比較調査、そして米国式葬儀実践の日本に対する導入の実態把握を通して、高度産業化社会において「死への対処」の集団的傾向がどのように構築されているのかという問題を探究することを目的とする。この試みは、諸分野において従来では寡少であった「死を社会科学から捕捉する」という視点を有した研究となることを念頭に置くものである。また本研究においては、文化人類学並びに他の社会科学における近接領域の理論的蓄積を用いつつ、日米双方の葬儀産業内部において調査を行うことを作業の主軸として、現代における死への観念と実践がいかなる社会的条件のもとに設定されているかという点を、現場から把握することを目論んだ。

【研究の内容・方法】

本研究期間においては、まず東京都S区にある葬儀社「N社」に従業員としてフルタイムで勤務しつつ調査を行うというフィールドワークを行い、その立場を当該研究期間内に亘り継続することで、葬儀産業内部の業務内容の把握につとめた。この調査においては他従業員と同じ勤務ローテーションに入り、24時間態勢で受注に応じ、見積・打合せへの随行、遺体の引取りと搬送、設営、案内誘導、霊柩車の運行など、多岐に亘る業務を遂行した。同時に、葬儀の現場だけではなく顧客の獲得営業から新規サービスの開発にも着目し、葬儀産業全体の輪郭と内実を把握する作業を行った。

また、国内調査においてはこの他に大阪市内の複数の葬儀社に対する出張調査を実施して、東京地区以外の大都市における葬儀実践の情報を捕捉することを試みた。大阪地区の調査においては、現場の従業員としての作業は調査先の状況を考慮して若干に留まり、主に葬儀産業関係者、並びに遺族への聴取を中心として調査を行い、東京地区の調査で得たデータとの比較対象を撮取することにつとめた。

さらに、米国サンフランシスコにある大規模霊園地帯であるコルマ地区(The Town of Colma)を取材するとともに、その近辺にある葬儀社に聴取を行い、米国における葬儀産業の潮流と、日米双方の葬儀産業において情報及び人的資源がどのように往来しているかを調査した。ここでは主に米国において葬儀業務を指揮する公的資格を有するフューネラル・ディレクター、そして同じくエンバーミング(遺体の維持保存技術)の公的資格を有するエンバーマーから、米国における新しい葬儀実践の実情と、日米間の情報の往来についてデータを撮取した。尚、当初申請の予定では米国での出張調査はニューヨークを予定していたが、受入先の予定が整わず、サンフランシスコに変更したことを付記する。

【結論・考察】

上記調査の結果として、現代日本においては葬儀という機会における「わたしらしさ＝わたしらしい葬儀」の強い表現、そしてそれを可能にする新しいサービスの開発という2つの要素が、産業システムのなかで強化されているという様相が観察された。また、

米国調査で得たデータの限りでは、日米間における強固な相互の情報の結びつきは見受けられなかったものの、既に何人かの日本人が米国でエンバーマー免許を獲得して日本で開業したり、日本の葬儀社が米国流の契約手法や演出表現に着目したりするなどの動きを見せており、「米国から日本へ」という方向でグローバルな情報・人的資源が往来する胎動が見受けられる。以上より、現代においては葬儀が商品・サービスとして捉えられつつあり、その枠組みのなかで消費者でもある「わたし」という存在を葬儀において表現したいという欲求が、社会のなかで増大しつつあるという言明を以って、一先ずの結論としたい。